

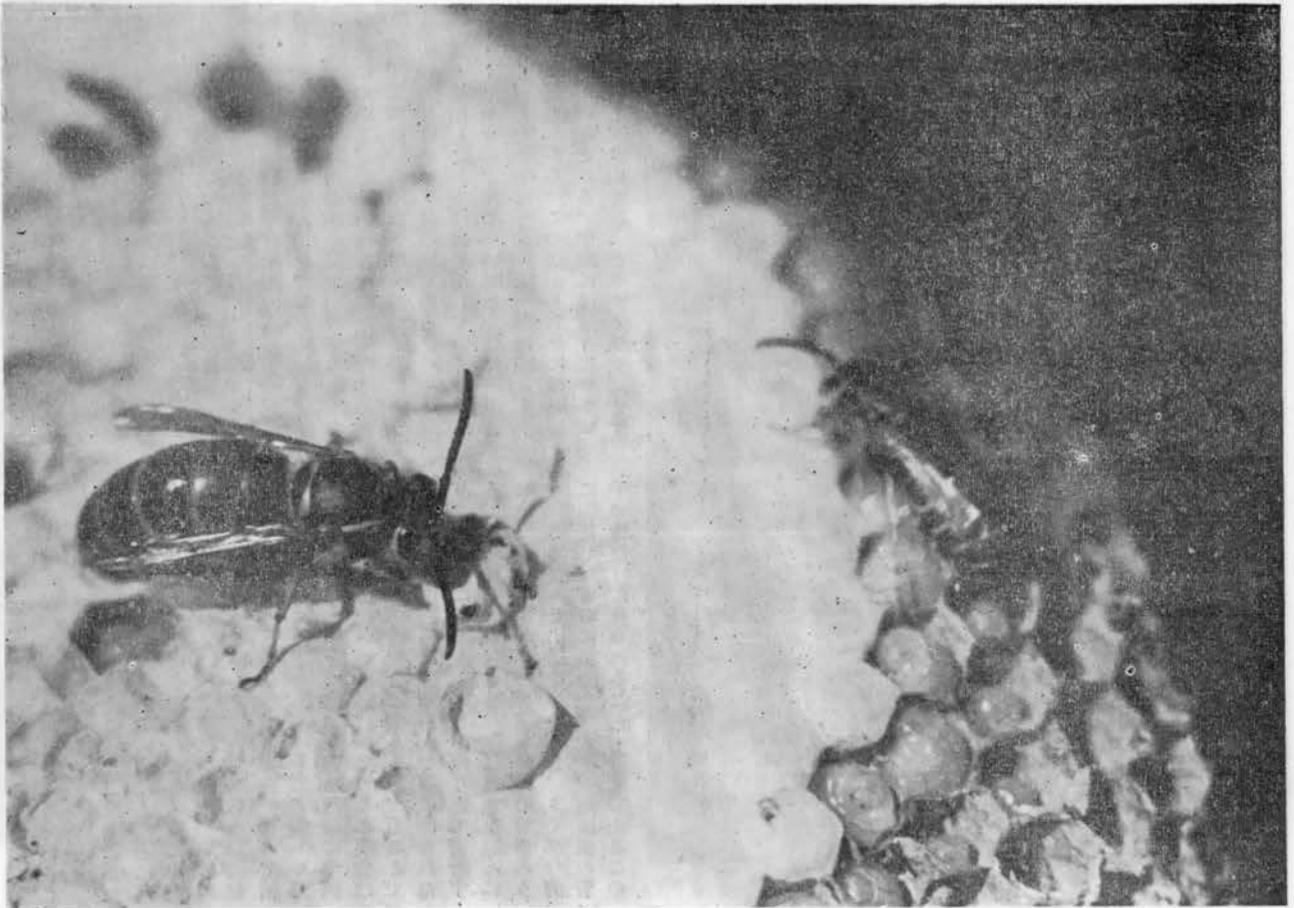
山と博物館

第11巻

第9号

1966年9月25日

大町山岳博物館



山の美化への提言

長野県山岳協会では、北端は雨飾山から南端は光岳までの広域な山頂約一〇〇峰に、同時気象観測、無線の広域通信、山の美化等のテーマをもって九月四日正午登頂のルールによる合同登山を実施した。

私が参加した野口五郎岳、その中で感じたこと、特に「山の美化」について述べてみたい。ゴミ四脚を持ちかえるという目的の一つをもって登ってみて驚き、かつ大きな幻滅感を覚えずにはいられなかった。何と紙くず空糞などのゴミの多いことか！こんなにもよごれてしまっている山に気付かなかった自分の無神経を反省するとともに、なんとかしなければならぬと真剣に考え込まざるを得なかった。

よごれによこれたブナ立尾根、縦走路に点在するテント指定地の気持悪さ、それにひきかえ、きれいにはき清められた烏帽子小屋周辺、紙くず一つ落ちていない縦走路は、静かな初秋の山のすがすがしさで改めて新鮮な気持を与えてくれた。常にこうありたいと思う。そのためには、やはりゴミを捨てない、持ち帰る、この原則の普及確立こそ急務であろう。しかし現実の問題としてその徹底は難かしく日時を要するものと思われる。

そこで、「山の美化」、これを掛け声だけで終らせぬためにゴミ箱の設置を提言したい。その設置には私たち大町山の会として全面的に協力したい。ゴミ箱(籠)の寄贈をいただければ幸いである。

(大町山の会々長 久保田 稔)

乗鞍山で笹の実を採る

室井 緯

「コトシヤ、満作オササノサ、笹に実ガナル、麦モヨシ、笹ノキゲンデ暮スノカ、オウサ、オササノサ」

「笹コ娘ガ、シナヨクトマル、オササノサトメテトマラス山登リ、此レハ誰ユエ、オ笹ユエ、オウサ、オササノサ」

昭和一〇年頃に神田の古本街で「竹実(ササノミ)の記」という和本を買って読み、かつて長野、岐阜の両県に大々的にクマザサ類の大群落が開花結実したことを始めて知ったところが、それから約一〇年後の昭和一八年八月一八日「写真週報」を入手したところ、またまた、乗鞍山を中心とした広大な山地のクマザサが開花結実がみられ、地方の山、中学生や勤労報国隊員など五〇〇余名を動員、収穫七万八千キロを目標に実施された。一方これらの採集男子部隊の労苦に比べて、女子部隊は乾燥方を引き受け、各学校の校庭を笹の実で埋め尽した。やがて、この笹の実は小麦粉の代用として、製麺、製菓、製パンの原料に利用されつつある記事が眼についた。

右の開花結実の実況を探るために、同僚土井氏とともに出かけた。

八月二五日、高山線の客となる。山中七里辺にはごく稀にモウソウチクとマダケとの竹林が眼につく。いかなる理由か、ハチクの藪がみつかからない。善勝寺駅付近で初めてハチクの藪を一つみることができた。この辺ではモウソウチク、マダケは全く姿を消してしまふ。これらは寒がりの竹であるので冬の雪に傷つけられるためであらう。

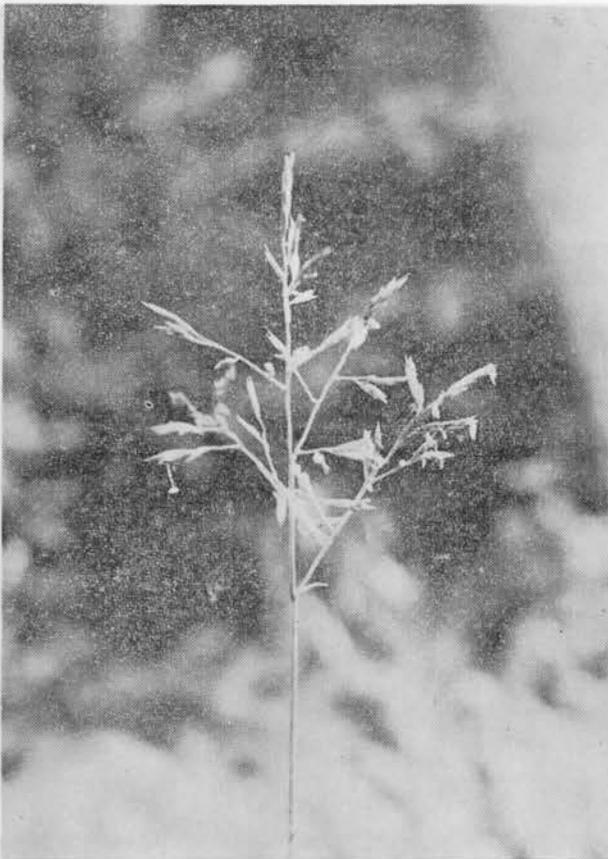
夕方、五時、高山看、駅付近の市民の話で

は、当地の高山国民学校校庭で笹の実の天日乾燥をしていることを聞き、早速同校を訪問した。そして同校長から乗鞍山の笹の結実の状況について、いろいろとお話を伺う。

翌、二六日、八時の一番バスで平湯に向う途中の竹林はハチク林のみである。バスは山間部を迂回しながら標高を増していく。ほぼ千メートルを過ぎたぐらゐから大型の笹が目につく、そのうちに平湯峠(一〇六四メートル)に差しかかる。この辺から右手に乗鞍岳の雄峰がぞまれる。中腹には所々にシラビソが点在し、全山を覆ったシナノザサ(チマ

キザサ)は一面に褐変して晩秋の稲田の様相である。ただ今が採集の適期であるということであつた。

左手の陽向の地は、既に二、三週間にわたって果実を採集した後で、笹のほとんどは落葉してしまひ、山火事の跡のように実に惨憺たる山肌を呈している。開花は順次、地面に位した所に移っていく。峠の上からバス道を見ると、全山みな開花して黄褐色に染まって枯死しているのに道路の両側一〜二メートルだけが青々とした葉をつけ、開花の行動に歩調を合わせていないのに気付いた。この現象は全面開花の時には、どこでもみられることである。これは鞭根の先端が人や車に踏まれたり、あるいは道路工夫などが嫌などで切断することが笹を若返らせ、生活現象を盛んにして、開花ホルモンの形成を防ぐのであろう。笹の茂つた山道を歩くとき、よく部分的に開花したものに出会う。大抵、道路側の若干の株だけに見られることが普通であるこの



シナノザサの花

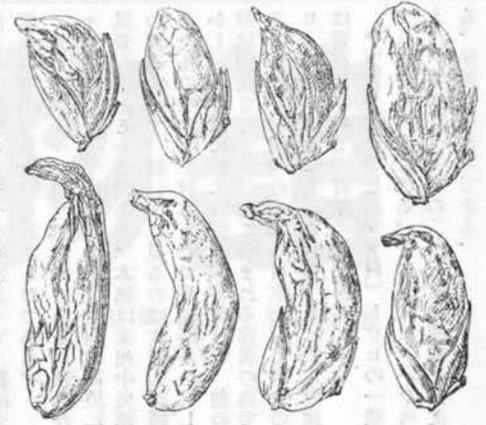


シナノザサの果実

原因はどうも笹藪の全面的開花のときに咲き遅れたもの、すなわち、出遅れというか、開花のずれと考へたらよさそうである。平湯峠から二〜三キロをくぐると温泉郷平湯である高山市を発つてから三時間あまり、バス終点には幾軒かの旅館が並ぶ。停留所の前小さい土産物屋の店頭で、笹餅団子の看板が眼についたので、早速、飛び込んでみる。餅は黄色で長径七〜八センチ、短径三センチ厚さ一・五センチの楕円体で、一個三錢(當時ハガキ二枚の価格)、二〇個一包みとなつていて五〇錢、原料は笹実と小麦粉を半々にしてむして作った由である。土井氏と二〇個一包みを買ひ、試食をする。味は粉の粗製のことであつて至って不味で、なかなか続けて一個が食えない。

宿舎で中食を終え、旅行用品一切を旅館に預け、採集道具だけを持って宿を出る。開花している種類はすべてシナノザサ(チマキザサ)で稈の高さ一〜二メートル、花穂は稈の中部以下で一稈から三、四本も伸び、穂の高さは稈と同長か、あるいは極く僅か高く伸びる。結実数は種々で頗る不定である。普通は一穂に三〇〜七〇個の果実が稔り、大部分は糞である。そのうちから結実数、糞数を比較してみると

結実数	不稔実数	計	稔実歩合
三六	三八	七四	四八・七
三七	一四六	一八三	二二・七
四二	一五六	一九二	二一・七
六四	一五六	二二〇	二九・一
七四	一九五	二六九	二五・七
平均			二九・九



ハツカク(麦角)

また、乗鞍岳で採集した果実、一合(一〇・一八リットル)の粒数を調査すると、つぎのようである、

粒数とも 二二二〇粒
 脱穀したもの(もぎ採り) 八二二二粒
 (打ち落し) 五六〇二粒

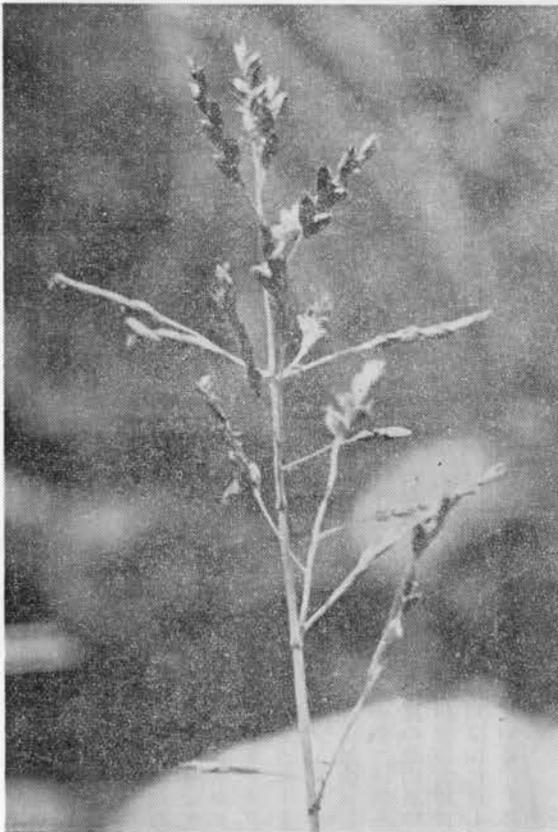
右の表で明かなように打ち落し完全したものが粒が大きく、よく充実したことを示している。それで山での採集には大型のざる、あるいは口の広い籠を果穂の下に受けて、穂を右手で打ち、熟した果実だけを採るのである。

翌八月二十六日、北面した乗鞍岳に登る。道の両側には稔った重い穂が垂れ下る。私はリニックサックの口を開いて、よく稔った果実を打ち落した。その時に見馴れぬ黒紫色をした笹実の三倍大のものがついているのに気づき割って見たところ、かつてライムギについた標本で見た麦角ではないか。手で角状のところを割って見ると特有の鮮かな紫色で、すぐ麦角であることに気づいたのである。今までに岩手県盛岡市民が笹実のパンを食い流産あるいは早産したという噂を聞いたが、その原因はこれだと大喜びで麦角集めに全精力を打ち込んだ。二日を費して麦角五リットル余

りも集めることができたのである。帰宅後、各大学や製薬会社などに届けて研究資料にして貰った。その時、京大の生化学の某教授から「有望らしいから一トンほど集めてほしい」と希望があったが、一トンというのはやさしいが、実に長大な量なので到底実行できかねるので敬遠して私の採集地点を報告して責任を免れた。

また帰宅後、方々で採集した笹実中で、麦角数を調査したところ一升(一八リットル)に二〇〇粒内外が含まれていることが判った。なお、宿舎では高山営林署の方と同宿であったので種々の便宜が与えられた。署の方の話では勤労報国隊の方は一日に一人で、四斗俵一俵以上を採ったということである。同署の調査によると開花面積は一千町歩に及んでいるということである。一坪に一升の結実したものとすると三万石の巨数に上ることになる。表示すると、

開花結実面積 一〇〇〇町歩
 一坪一升結実したとすると三〇〇〇〇石
 勤労報国隊の採集量 一六〇〇〇石



シナノザサの果実

四斗俵にする 四〇〇〇俵
 一俵九貫詰とする 三六〇〇〇貫
 当時一俵二十円で取引された総計 八〇〇〇〇円

製粉歩合六五%の由、全量二三四〇〇貫私は乗鞍岳の中腹で、最もよく稔った所を一坪の果穂全部を刈り集めて測ったところ、三升余りも採ることができた。笹の実は熟期が不揃いで既に落果したものがあり、同時に開花中のものがあるから実際の数ははるかに上廻ると思われる。

右の数字は平均して坪一升と考えたのであるが、それでも実際に採果量は僅かに五八パーセントにすぎないのであって、平湯辺の開花地一面に撒いたように無数の笹の実が見られた。この落下した果実をノネズミが食べるために方々から集って、後に笹の実が欠乏した冬季から森林植物の周皮をかじって大害を与えるのが普通で、営林署ではこのネズミの対策に大苦であった。

クマザサ属の果実は、幾ら地に落ちてても、その年には発芽せず、翌年の春に発芽するだ

けである。多くのものは地上で乾燥して発芽力を失い、あるいはノネズミや鳥獣などの餌になってしまふ。発芽するものは地に落ちた瞬間に土の中に埋もれた(取り時きである)ものだけで、こんな幸いな果実は極く稀なことである。むしろ発芽することが不思議なのである。(富士竹類植物園長・農博)

博物館だより

文化祭の計画について

今年度の大町市の文化祭は、十一月二日から八日まで行なわれるが、本館で開催する計画の概要は次のとおりです。

一 展示会

○ 遭難展通常展示を強化し、階上に遭難をなくそうのテーマで、去る二月に大山勝裕氏より寄贈された遭難関係の写真二十五枚を展示。

○ 陶器展藤田義一氏の作品を展示。

二 映画会

日本シネセルK・Kの協力で文化祭期間中本館講堂において映画会を開催する。上映フィルムは「日本の鮭・鱒」はじめ二・三本、上映時間二時間で毎日午前と午後二回上映。

カモンカ愛称きままる

山博では、この七月十日、大町市郊外高瀬川、東京電力第三発電所付近で保護した仔カモンカに名前をつけようとして、名前の募集をしていたが、八月三十一日まで三十八通の応募があり、選挙の結果「岳三」を採用することにした。

カモンカは「岳子」「大助」とこの「岳三」を加えて三頭とも愛称をもつことになり、訪れる人に喜ばれている。

なお当選者荒井幸子さん他八名の方に、この「岳三」写真を添付したアルバムを記念品として贈った。

信濃国＝長野県という所は日本国中で一番植物の種類が多い所である。私が調べた所ではシダ類以上の高等植物の種類が変種や品種まで加えると実に三八五〇に達する。他の府県では多くて三〇〇〇以下である。長野県は面積が広いし、高山が多く重なり合っていて、火山あり、古い地質の山ありで地質的にも変化きわまり無いけれど、最も大切な事は分布区域の違った場所が集まっていることである。北部は日本海要素が、南は外帯要素が分布している。その上、フオッサグダナ構造線によって東西に分かれている。また明治時代から多くの植物学者や植物愛好家や登山家などワンサと押しかけて来て植物を研究したので一層その種類が沢山知られるようになった。ここに信濃の代表的な植物若干を述べよう。

オシヤゴジデング(ウラボシ科) 外形がアオネカズラに似ているが根茎が違って、標本に作ると一方へ巻くような形になるので良く判る。明治初年に田中芳男氏が木曾の社貢寺で初めて採集してその名ができた。

シダ植物にはその外、タカネシダ、ヤツガタケシノブ、シロウマイタチシダ、センジヨウデング、トヨグチイノデ、イナデング、などの信州地名を持つものがあって、初めて信州の高山で見付けられたものである。

カラマツ(マツ科) 針葉樹であるが秋になって黄色くなつて後落葉する。信州の高原に風景を添える一つである。本拠は本州中央部の亜高山帯で、低い山に見るのは大抵人が植えたものである。材木として用途が多い、しかし、この木の林には笹が繁るだけで、他の草は消えてしまう。葉に含まれる毒薬の為であるらしい。信州の名物の材木として木曾のヒノキを掲げることが出来る。とくに木曾産は質が良いので、材木の価額が高い。

ヤツガタケトウヒ(マツ科) トウヒの一種で八ヶ岳の特産である。その外にヒメバラモミ、アズサバラモミの二つも信州固有といえる。保護すべき木である。

ケショウヤナギ(ヤナギ科) ヤナギ科の木は沢山の種類があるが、本種は葉に白粉をまいた様に化粧して美しい。その上分布上からも珍らしく、東北アジア、カラフト、北海道の東南部に分布するもの。上高地の川原に群生し、その風景を引き立てている。

シラカンバ(カバノキ科) 誰でも知る如く木の皮が紙のように真白い。本種は少し寒い地方のものであるが、しかし北海道や東北地方でも限られた区域にだけ分布し、決して北国のどこでもあるものではない。信州の山地には到る所に多く、上高地、志賀高原、軽井沢を初め信州名物の一つであろう。ダケカンバはシラカバよりも高い所に生える別種である。シラカバよりも木の皮の色が黄色味を帯びているし、葉や果実も違っている。

信濃植物べっ見 杉本順一

チョウノスケソウ(バラ科) 木として一番小人に属する。八弁の白い花も美しいが、果実は花柱が伸びて特別の形を示すので名高い。信州の高山の中でも三千米級の高山にだけ産する。須川長之助という人が発見した。バラ科には花が美しいものが多く、またノリクラキイチゴ、シナノキイチゴ、キツキイチゴのように信濃の地名のつくものがある。

ハナノキ(カネデ科) 葉の裏面に白粉を粧って美しい。花もまた真っ赤で実に見事である。信州では大町市の一部、西筑摩、下伊那の所々に稀生し、湿地帯に好んで生ずる。この近縁の種類が北米に分布することは植物地理学的に「ナゾ」とされている。信州はカエデの種類に富み、日本産の大部分のものを産する。シバタカエデは北関東と信州の梓山と菅の平に知られる稀品である。

レザクラの如く枝が垂れ下がる性質がある。信州では各地に点々と数本づつ群落がありその内の数カ所は天然記念物に指定された。

シナノキンバイ(キンポウゲ科) 高山植物では最も美しいものの一つで、信州のどの高山にも生じ、登山者の目を楽ませてくれる。信州の高山にはヤツガタケキンポウゲ、キリガミネキンバイソウ、ミヤマトリカブト、ハクバブシ、オンタケブシ、タカネトリカブト、イチョウバイカモ、シナノレイジンソウ、ツクモグサなど珍らしい高山植物に富む。トガクシヨウマ(メギ科) 淡紫色の美しい花を春咲かせるので、夏の登山者には気がつきにくい。明治中頃に伊藤篤太郎博士が戸隠山で発見した。白馬や戸隠山に産し、なお東北地方の西半に分布している。日本特産で世界に一属一種の稀品である。

シナノキ(シナノキ科) 信濃の語源は実にシナノキが多く生じるからであると云われる。更級、埴科の地名も同様であろう。花序に包が流れ着き、他の木と区別し易い。また葉も左右に不揃いである。枝の皮は丈夫であるから縄や麻の代用に用いる。ノジリボダイジュはシナノキとオオボダイジュとの自然雑種で、野尻湖付近で発見されたものである。

シナノオトギリ(オトギリソウ科) 信州特有ではないが矢田部長吉博士によって西駒岳で最初発見された。その他この科には、シロウマオトギリ、トガクシオトギリ、シナノヤマオトギリ、オオシナノオトギリ、セイタカオトギリなど信州で発見された珍種がある。ヒメスマイレサイシン(スマイレ科) は花が白色のスマイレの一種。矢沢米三郎氏が一八九九年八ヶ岳で見発見した。信州所々に稀生し、甲州

の一部にも少し分布するだけ。信州はスマイレの種類が多く品種や雑種まで数えると、百二十余に達する。信州固有のタデスマイレは葉がタデに似たもの。その他にナエバキスマイレ、スワキクバスマイレ、キツスマイレ、コモロスマイレ、スワスマイレ、シナノスマイレ、ホツチスマイレ、など県下の名のつくものがある。

ヤエキバナシヤクナゲとネモトシヤクナゲ(ツツジ科) 信州はシヤクナゲの種類に富み前者はキバナシヤクナゲの、後者はハクサンシヤクナゲの変り物である。東側にはアズマシヤクナゲ、西側にホンシヤクナゲ、南部にキヨウマルシヤクナゲを産する。

レンゲツツジ(ツツジ科) 信州の初夏を飾る最美の花といえる。とくに高原と云っても中腹の山や原に多い。信州にはツツジの種類が多い。北と南では違った種類の対立がある。たとえば、北方にオオコメツツジ、オオバツツジ、サイコクミツバツツジ、ムラサキヤンオが多く南部にはチョウウジコメツツジ、コバノミツバツツジ、モチツツジ、ミツバツツジ、シロヤンオ、アカヤンオ、などが多い。

お願い「山と博物館」の購読者をつのっておきます。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)

表紙説明
クロスズメバチ
撮影 海川庄一

山と博物館 第11巻第9号
一九六六年九月二十五日発行
発行所 長野県大町市TFL(大町)二一
大町山岳博物館
印刷所 大町市下仲町
大糸タイムス印刷部